# アマテウス通信 (制作・著作) 日本モーツァルト愛好会 ま152,0022 東京教 日 思 区 はの ま 152,002

〒152-0022 東京都目黒区柿の木坂2-22-23

朝吹 英和 方

2018, 12, 20 No. 51 TEL&FAX 0 3 - 3 7 2 5 - 7 1 7 9

### グラン・パルティータ(K.361)



K. 618 紺野

愛好会の同報メールに、9月9日横浜・本 郷台のリリスホールで表記の含まれる「身体 にいい音楽会」の紹介があったので、聴きに 行ってきた。

大船から根岸線で一つ横浜方面へ戻ったと ころ。田舎だと思ったら高層マンションの新 しい街で、文化センターは大きな宇宙ステー ションのよう。その中にあるリリスホールは 快適で聴きやすい中ホールであった。

演奏したのは若手の管楽器奏者総勢13人 と通奏低音のコントラバス奏者で、グループ の名前は特についていなかったが、相当な実 力者の集団であることがうかがわれた。

最初に「フィガロの結婚」序曲が、舞台に向 かって左からそれぞれ一対のオーボエ、ホル ン、ファゴット、クラリネット、中央に通奏 低音という配置の9人で演奏された。木管の 各楽器がソロとオケを兼ねる楽しい演奏であ った。

次に同じメンバーで K.297b の協奏交響曲 が木管八重奏版で演奏された。これには前の

曲とは楽器の配置が異なって、舞台下手に独 奏部を担当する各楽器の4人、上手にオーケ ストラパートを弾く4人、真ん中にコントラ バスというシンメトリーな配置を取ってい た。この曲は自筆の楽譜が紛失していて、も ともとフルート、オーボエ、ファゴット、ホ ルンの独奏とオーケストラで書かれたらしい が、誰かの手でフルートがクラリネットに替 えられたということで、偽作の疑いもあると いう。

休憩をはさんで、主催の「癒しの医療を考 える会」理事長の小林修三先生のお話があっ た。先生は音楽(クラシック)を医療に取り 入れて、癒しの効果を持たせることを実践さ れている方で、モーツァルトに関しても非常 に詳しく、司会者のインタビューに答える形 のトークであったが、大変興味深いものであ った。中でも、モーツァルトの死因について 今までいろいろ論じられて来たが、幼時に旅 行先で罹った腎臓の感染症が慢性化して晩年 余病を併発し、死に至ったと仰ったのが印象 に残った。一般には死因は「急性リューマチ 熱」とか言われているが、旅行中に少年モー ツァルトが病気になり、父親レオポルトが故 郷への手紙に「ウォルフガングは熱を出し、 のどが痛いと訴え、足に発疹が出ている…」 と書いているのがその類推の根拠であるとの 説は、非常に説得力があると感じられた。今 の医療なら検査も抗生剤での治療も容易で完 治できるだろう、瀉血(患者から血を抜く: モーツァルトばかりか、パリで病気になった 母親もこの治療を受けた) などで命を縮める

ことなく長生き出来て、さらに沢山の名曲が 残せたのではないか、と私は思ったのだった。

後半の演奏はいよいよセレナード第10番 変ロ長調(グラン・パルティータ: K.361)で ある。映画「アマデウス」でも、サリエリが 神父に述懐するシーンや、モーツァルトがコ ロレドから解雇されて、皮肉たっぷりで挨拶 するシーンで出てきたので、覚えておられる 方も多いと思う。13管楽器とはオーボエ、 クラリネット、バセットホルン、ファゴット が各2本、ナチュラルホルンが4本と、コン トラバスの13人で、コントラバスはしばしば コントラファゴットで演奏されるので、13管 楽器のグラン・パルティータと呼ばれるよう になった。前半のメンバーのファゴットが一 人入れ替わったほか、ホルン二人、バセット ホルン二人が追加になった豪華メンバーが指 揮者なしで演奏する。気合の入った質の高い アンサンブルであった。若気の至りか、ハイ テンポで飛ばすことはあったが乱れることは なかった。

この曲にはいろいろ思い出がある。生演奏を初めて聞いたのは1997年6月29日、御茶ノ水ヴォーリスホールでの愛好会第212回例会であった。愛好会の例会でこれを生で聴いたのは後にも先にもこれだけであった。現会員でこの演奏を聴かれた方は何人残っておられるだろうか。神奈川県立音楽堂での神奈川フィルのメンバーによる演奏はいつだったか忘れたが、金昌国氏を指揮者に立てたがっちりした演奏であった。

2001年12月12日ロンドン・ウィグモアホール、英国室内管弦楽団のウィンドアンサンブルの演奏も思い出す。この日、ロイヤルオペラへ行ったら満席で当日券が取れなくで、コベントガーデンから急きょボンドストリートへ地下鉄で急行した。オックスフォード通りの北側に並行するウィグモア通りに建築後100年余、赤い大理石の豪華な小ホールがある。行ってみると何と全くの幸運、この曲が

演目であった。ベートーヴェンの変ホ長調五 重奏曲(作品 16)に続いて演奏された。プログラムには指揮:ラルフ・ゴゾーニと出ていたが、舞台には出ず、どこでどう指揮したのかはわからない。もちろん名演であった。

亡くなった愛好会創立メンバーの横溝正信さんが大好きな曲だった。存命なら今回一緒に聴きたかった。例会に演奏家 13 人を呼ぶのは大変なことだろう。他のグループと一緒でもいいので、ぜひ企画して頂きたいと思う。



フランツ・リスト

### K.515 Y. H.

アルペンミュージックオフィスからいただ いた招待券、銀座ヤマハホール、志鷹美紗ピ アノリサイタルのプログラムにリスト、巡礼 の年 第2年《イタリア》より「ダンテを読 んで」~ソナタ風幻想曲~が入っていた。「愛 の夢」「ラ・カンパネラ」以外のリストの曲 にはほとんど馴染みがない。マリー・ダブー 伯爵夫人との恋、娘コジマとワーグナーとの 関係等から気になり始めて 20 代後半一時期 興味を持ったリスト。モーツァルトに次ぐ我 がアイドル、ショパンの親友かつライバルで あることもあり、ブダペストのリスト・フェ レンツ広場とリスト音楽院を訪れたこともあ り、気にはなっていたがさらに突っ込んでど うのこうのというのはなかった。村上春樹『色 彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』 に「ル・マル・デュ・ペイ」が登場して再度 興味を注がれもしたが、やはりそこまで。取 っ付きにくい何かがあったのかもしれない。 はたまた敬して遠ざけるか。それが生演奏で 聴ける機会をいただいたのだから、この機会 にとにわか勉強に至ることとなった。

ダンテを読んでいないと感受できないのか しらと思いつつCDに耳を傾ける。謎めいた 深遠な世界、闇、般若心経、悪魔、突然の強 音、奥深い森と泉…、一聴で好きになれる曲 ではない、背景を知らないとやはり無理かし ら、と、数回聴いてみる。完全に個々人のイ マジネーションの世界としか思えない。

さて、残暑が残るが秋の気配も感じ始めた 頃の 9/8 (土) 、銀座ヤマハホールへ意気揚 々と出かけていった。水が滴り落ちるような 音のドビュッシー前奏曲から始まり、ベート ーヴェン「月光」と馴染みのある曲が続き、 いよいよ最後の待望の曲、リスト「ダンテを 読んで」。私には難解なこの曲をどのように 展開していくのか興味津々。集中力を高めた 若き麗しき女性ピアニストが一気にひたすら に弾いていく。音楽的なことは分からないが、 音響のいいホールに"小宇宙"が出現し、ダ ンテの時代と思しき時代の神秘的な世界が繰 り広げられていく。CDでは感じられなかっ た、超絶技巧の音がつかぎ出す魅惑と壮大な ロマンに包み込まれていく。ダンテ「地獄編」 の断片でもかじっていれば、さらに見えてく るものがあったのかもしれない。ピアニスト はこの曲をどのように解釈しどのように咀嚼 して奏でようとしているのか、お聞きしてみ たいと思った。リストという新たな音楽家へ の誘いの始まりである。

浦久俊彦著『フランツ・リストはなぜ女たちを失神させたのか』に印象に残る場面がある。1824年3月7日、リストが12才でパリ・デビューをした時のこと。「まさにセンセーショナルな大成功だった。興奮した記者の論評『私は、昨夜から霊魂再来説の信者となった。モーツァルトの霊魂が、この少年の肉体に乗り移ったとしか思えない!』」

この記者の評論に出くわした時、心底震えた。シューベルトでもベートーヴェンでもなく、モーツァルトの再来なのである。リスト

にモーツァルトの魂が息づいていることの証 であろう。天才という資質ではなく、"モー ツァルト"存在そのものが。

前回、平野啓一郎著『葬送』の感想文を投稿後、アドヴァイスと課題を下さった方がいた。「ショパンはモーツァルトからどのような影響を受けたのか、次回はその辺りを…」。これからの長い道のりであろう大きな宿題をいただいた感がある。

ショパンとリストとモーツァルト、楽しみがまた増えた。

1枚のプログラムから、今回は、思いがけず新たな扉が開かれた。このような機会を与えてくださった方々に感謝致します。

P.S. 終演後、3階の本屋に立ち寄りました。モーツァルトのコーナーに乗松昭さんの『モーツァルトへのオマージュ』が並んでいて感激しちゃいました。ポール・アダム著『ヴァイオリン職人の探求と推理』を見つけて購入、読み始めたところです。舞台はクレモナ、ストラディバリウス、アマティ、グァルネリのお馴染みのヴァイオリンが登場してきます。これらを題材としたミステリーを書き上げるとは、目の付け所がすごいですよね。本好きです。みなさんからのお薦め本、お待ちしております。



# 楽屋口から(7)

あなたも指揮者になれる?

K.191 白石 孝

答、指揮をすることは簡単なこと。でも指揮 者になるには才能が必要。

指揮をして「それらしい音が出る」、と「音楽表現ができる」かは別次元の話である。

まず指揮をすることから話を進める。

多分、小学校の音楽の時間に3拍子はこう、

4拍子はこう振るということを習ったと思う。

それさえ出来れば指揮はできる。 躓くとすれば曲の出だしだけである。

ただオーケストラの技術レベルが極端に低かったら話は別であるが。

ある水準以上のオーケストラなら最初にテンポさえ与えてやれば指揮者はいなくても演奏は継続できる。それはコンサートマスターに付いていくという訓練がなされているからである。

ちょっと譜例でも説明しよう。おなじみ「リンツ」の出だし部分である。

### << Linz.jpg を挿入>>



さあ、皆さんだったらどう振る? 3拍子だから1っち、2ぃい、3ぁん。 四分音符=30くらいで振れればプロのオー ケストラなら難なく、ちゃんとした音は出る だろう。

アダージョだからここは1っち・ト、2 いい・ト、3 ぁん・トと6 拍子に振るのが普通である。

(専門用語では「振り分ける」という。) 問題は3小節目の直前の32分音符。合うか バラけるかはオーケストラの実力がさらけで る部分である。

その音を持っている人 (バスーン、1 s t ヴァイオリン、2 n d ヴァイオリン、チェロ、

ベース)が指揮者を見ていたのではまずバラける。ここはコンサートマスターを凝視。その弓の動きに合わせて音を出す、そうすればピタリと合う。

次の4小節目の頭はコンサートマスターには音がない。ここは指揮者を注視して合わせる。ただしそれまでの3小節間で全団員が指揮者のクセを呑み込んでしまう必要がある。1拍目の振り始めがそのタイミングのこともあれば「溜めて」振り終ったところがそのタイミングである場合とがある。

こう文章で書くと難しいようだが、ある程度 経験を積んだオーケストラなら当たり前に出 来るものである。

だからズブの素人でも指揮者の真似をすれば それらしい音は出るのである。

だからあなたでも簡単に指揮はできる。

次に指揮者になるためには、の話をしてみたい。

本職 (?) の指揮者に必要とされる資質はど んなものだろうか?

この曲は知っているから指揮できる、この曲は知らないから指揮できない、では勤まらない。

スコア (総譜) を読んで頭の中には、ほぼ完 全にその音楽が鳴っている必要がある。

因みに多くの指揮者コンクールでは

- 1. スコアを一定時間見せられた後、その曲を暗譜で指揮する
- 2. 譜面は見てよいが楽員が何カ所か、わざと間違え、それを指摘させる

などといった課題が課せられる。

ブルーノ・ワルターは自著でこんなことを言っている。

「現在出ている音を聴く一方、頭の中には1 小節先の音が鳴り響いているのです。」 これができていれば間違いもすぐに判るし表 現がまずければ修正指示がだせるのである。 そして頭の中にある音楽に近づけていけると いう訳である。

現代では大抵の曲はCDなどで聴くことによ

り理解を速く深めることができる。しかしワルター、トスカニーニ、フルトヴェングラーといった時代の指揮者はごく限られたSPレコードしか参考に出来るものは無かった。すなわちスコア・リーディングの力が全てだったとも言える。

昨今のインターネット時代では音源も譜面も 実に居ながらにして入手可能である。指揮者 への敷居は昔に比べれば格段に低くなった訳 である。指揮者の数が増えれば音楽評論家の 仕事も増えて当然。今やコンサート会場へ足 しげく通っているリスナーはみな評論家の様 相を呈しているというのは言い過ぎだろう か。

余談:私の指揮経験

記憶に焼き付いているのは2回。

1回目は就職して間もないころ研究所のオーケストラから誘われてその合宿に同行した時の話である。ある研究員がこれはドイツ、ジーメンスの論理回路設計者が作曲した曲の譜面で、その人から貰ってきた。やってみようじゃないかと切り貼りしてパート譜をその場で作り演奏する運びとなった。弦楽合奏の曲だったので私はすることが無く、指揮してくれと言われて指揮。

メトロノーム替わり以外の何物でもなかった。

2回目は私の所属するオーケストラの年末行 事となっている初見大会。

日曜日の午後、シンフォニー4~5曲の譜面 を配り順次、通しで演奏するという企画。

2016年12月18日、本職の指揮者は用 事が有るので途中退場。その日の最後の曲を 指揮。

事前に企画担当には私がやるなら古典でないと出来ないよと言っておいたところ数目前にモーツァルトの39番をお願いしますというメールが届いた。まあよく知っている曲だからと安堵はしたが、いざやってみるとボロボロ。

1楽章の序奏部で拍を勘定できなくなって、 でたらめをやる団員がいて立ち往生した。で もその後は危ないところは有ったものの何と か最後まで止まらず演奏は完了した。

このとき日本人は本質的に3拍子は苦手というということが嫌というほど実感させられた。またその曲のハーモニー・トレーニングをしていないとここまで音程が悪いかも思い知らされた。美しいはずの39番が全然美しくない。

ただ繰り返し教え込まれている事は自然と身についているものであることには感心した。 3楽章のメヌエットでは「トリオはかなりテンポを落とす。」と伝えておき、その通りにやった。ダ・カーポしたときのテンポ感は見事だった。(訓練の足りないオケでは、トリオのテンポに引きずられ遅くなること必死。)まあメトロノーム替わりよりは良かったのではないかと自負。良い経験をさせてもらった。(つづく)

# My Favorite Mozart 私のお気に入りのモーツァルト

# ピアノ四重奏曲 第一番 ト短調 K.478

# K.294 藤田 真人

2012年、私が愛好会に入会したばかりの頃にピアノ四重奏曲を生で聴いてみたいと、ずっと思っていましたが、ついにその夢が叶って大喜びしたことがありました。

その時入会したばかりの愛好会の例会コンサートのことでした。

曲目は、ピアノ四重奏曲の一番、二番です。 イングリット・ヘブラーの CD を耳にタコが できるほど聴いた私としては、まさか、本物 の演奏を聴くとができるとは・・・ はやる気持ちを抑えながら、日曜の昼下がり、 会場の光が丘美術館へと出かけました。

演奏は東京藝大の大学院生の皆様。

とにかく、若くてエネルギッシュな演奏です。 やはり、若いっていいですね~

それにしても、ピアノ四重奏曲第一番の第一 楽章の冒頭部はベートーヴェンの出現を予見 させるかのような激しいメロディーで不意を つかれて、度肝を抜かれます。

そして第一楽章の中間部で、バックの弦が休止し、静寂の中で、ピアノがソロでゆったりとしたメロディーを奏でます。

(私の聴いているイングリッド・ヘブラーの CDで5分55秒あたり)

しかし、何度聴いても、このメロディーの美しさは、表現のしようがありません。

まるでエンジン付きのグライダーで自力で上空に上昇し、雲の上に出たところでエンジンを切って、大空を滑空しているような夢心地の気分にさせてくれます。

そう、宮崎駿監督の「天空の城ラピュタ」で バズーとシータが飛行船につながれたグライ ダーで二人で抱き合いながら大空を滑空して いる時のそんな感じでしょうか・・・

そして、ピアノのソロが終わると今度は弦が 静かに加わり始めます。

弦に合わせて、ピアノは教会の鐘を打ち鳴ら すかのようにアクセントをいれ、同じフレー ズが何度も何度も音階を上げながら繰り返さ れ、最後はピアノ、ヴァイオリン、ビオラ、 チェロの四者が一体となって、臨界点に達し ていく・・・

この部分では、頭にか一っと血が登ってしまいました。

第一楽章が終わった時には、おもわず、立ち上がって、「ブラボー!」いや、拍手喝采をいや、雄叫びを上げたかったのですが、その気持をぐっとこらえて、第二楽章を静かに待

ちました。

そして、第二楽章。

今までの嵐とは打って変わって、このなんと 美しい表現なんでしょうか・・・

ョーロッパの古城の湖にゆったりとたたず む、白鳥が脳裏に浮かびます。

日曜日の昼下がり、素敵なひとときを過ごすことができました・・・



# 「フィガロの結婚」を鑑賞しての俳句

### K.425 朝吹 英和

「私の好きなモーツァルト」のアンケートで見事第1位に輝いた「フィガロの結婚」を鑑賞しての句会を5年前に実施しましたので、作品の幾つかをご参考までご披露致します。(2013年10月29日、新国立劇場での公演)

序章へと弦すべりゆく黄連雀 長嶺千晶 もう翔べぬ秋の蝶なり詠ふべし 海野弘子 証文を銜え飛び去る秋燕 諏訪部典子 懲らしめの罠かも知れぬ狐花 栃木きよ 白帝や白き箱よりアマデウス 朝吹英和

ファゴットと弦楽器が細波のように響き、 管楽器群がそれを受けて展開すると生きる喜 びが迸るように躍動するフルオーケストラ。 序曲の開始と共に日常の世界から異次元空間 へと聴く者を一気に拉致するモーツァルトの 魔力。白と黒の対比を基調とし、大小の白い 箱を動かして場面転換した簡素なホモキの演 出。人間の心理、微妙に交錯し重層する感情 の綾、真情などが音の強弱と緩急、豊かなハ ーモニーと色彩の変化、転調などによって鮮やかに表現されるモーツァルトの音楽の素晴らしさに触発されて俳句が誕生した。(白帝は秋の異称)



# 野口秀夫先生のご講演を受けて ~モーツァルト永遠の恋人は ナンシーか、アロイジアか~

K.450 宮田 宗雄

7月の例会は、神戸モーツァルト研究会代表の野口秀夫先生をお迎えし、『歌姫ナンシー・ストレースへのオマージュ』〜新発見のカンタータ K.477a を巡って〜をお話ししていただいた。野口先生の綿密かつ多面的な調査と鋭い洞察力によって、カンタータ K.477aの成立過程がかなり鮮明に浮彫りにされたように思う。また貴重な映像(音源)を活用した説明は、とても分かり易く効果的であった。

受講後何日か経ち、自分なりにレビューして感じたこと、またある会員より「色っぽい話がなかった」との感想があったので、その側面を補足してみることにした。

カンタータ《オフェーリアの健康回復に寄せて》K.477a(K.Anh 11a) は、ダ・ポンテが詩を作り、モーツァルトとサリエリ、それに野口先生が作曲家でナンシーの兄スティーヴンと推察した偽名のコルネッティの共作ということであるが、モーツァルトは共作そのものが少なく、またサリエリも一緒に仲良く作曲したことに興味を持った。尤も、モーツァルトとサリエリの仲が悪かったという説は、話を面白おかしくするために、後世の人が創作

したものと思っているので、この共作はあり 得ることだと思った。事実、モーツァルトは サリエリを自分のコンサートに誘ったりして いた。

1787年春にナンシーは、母と兄スティーヴ ン、テノールのマイケル・ケリー、それにモ ーツァルトの弟子で作曲家のトマス・アトウ ッドと共に大挙してロンドンに帰郷し、もう 二度とウィーンの地に戻ってくることはなか った。その理由は定かではないとのことであ ったが、野口先生は音楽的環境によるもので はないかと推察した。1788~89年、モーツァ ルトのコンサートが激減するなどウィーンで の景気はどん底になっていた。モーツァルト は、1786年10月18日、三男ヨハーン・トー マス・レオポルトが生まれ(翌11月に死去)、 生活費を稼がなくてはという意識が強くな り、転機をロンドンに求めようとした。礒山 雅先生はご自身の著書の中で、1786年には父 レオポルトにイギリスに行くので子供を預か ってくれないかと持ち掛けていることから、 《フィガロの結婚》の上演が打ち切られたあ たりで、既に渡英を考えはじめたのではない か、ロンドンに帰郷した仲間は、折に触れて イギリス訪問をモーツァルトに勧めたことで あろう。イギリスが音楽の大消費地であり、 絶好の稼ぎの場であることを、モーツァルト はよく知っていたと述べている。

1786年11月17日、父レオポルトは姉のナンネルに次のような手紙を書いた。「おまえの弟が二人の子供を私に預かってもらえないかと頼んできた。次の謝肉祭の半ばから、ドイツを通ってイギリスへ旅行したいというのだ……まったくいい気なものだ! お父さんが預かってくれたら、ぼくらは旅に出られます……イギリスに残るかもしれません……そうしたら子供たちを連れてあとから来てくださいだと。私は断固ことわった」このようにモーツァルトのロンドンに行きたいという野望は父レオポルトによって一蹴された。結局、モーツァルト自身、ウィーンで弟子を取るなど

独立した音楽家として身を立てる方が良いと 考えるようになったが、モーツァルトのみな らず、ナンシーおよびその仲間が、ウィーン よりロンドンの方が音楽家として活躍の場が あるというような判断が働いた可能性は高 い。従って、音楽的環境によるという推察は 妥当だと思った。

事実、1787年ロンドンに戻ったナンシーは キングス・シアターでジョヴァンニ・パイジ ェッロの"The slave of Love"に初出演し、更 には兄スティーヴンの作品を歌うなど次々と 成功を収めた。

それより遡ること8年前にも、同じような ことがあった。モーツァルトは、アロイジア とイタリアに行きたいと父レオポルトに懇願 したのだった。「お願いですから、ぼくらが イタリアへ行けるよう、最善をつくしてくだ さい。ぼくの最大の願いが.....オペラを書くこ とにあるのはご存知のとおりです……それで アロイジアの名声が高まればいいのです。も しぼくが書かないと、彼女が犠牲になるんじ ゃないかと心配です。それまでに、ぼくらが いっしょに計画しているほかの旅で、困らな いだけのお金を稼ぎましょう.....オペラを書 きたいというぼくの願いを忘れないでくださ い」(1778年2月8日、父レオポルト宛マン ハイム)結局、モーツァルトは父レオポルト の執拗な忠告に従って、イタリアではなく母 アンナ・マリアと一緒にパリへ行ったのであ った。

「たられば」の話になってしまうが、もし モーツァルトがアロイジアとイタリアに行っ ていたら、どうなっただろうか?もしモーツ ァルトがナンシーのいるロンドンに行ってい たら、どうなっただろうか?果たして、父レ オポルトの判断は正しかったのか?想像する だけでも興味は尽きない。

モーツァルトは、ナンシーのためにレチタティーヴォとアリア《どうしてあなたが忘れられるだろうか / 心配しなくともよいのです、愛する人よ》 K.505 を 1786 年 12 月 26

日に作曲し、ナンシーがロンドンに戻るにあたって開かれたナンシーの告別演奏会(1787年2月23日、ケルントナートーア劇場)で、そのアリアをナンシーが歌い、モーツァルトがピアノを弾いたと言われている。このアリアは、通常のオーケストラ伴奏の声楽曲ではない。オーケストラが伴奏するソプラノに、あたかもそれと対話するようなピアノ・追身があたかもそれと対話するようなピアノル自身が直接演奏に加わって一緒に喜びに浸りたかった方が適切であるという見方もあるくが愛を語り合っているように聞こえる。

モーツァルトの自作目録には「ストレース 嬢と私のために Für Madmoiselle Storace und mich」と、更に自筆楽譜には「ストレース夫 人のために、その下僕にして友なる W.A.モー ツァルト、ウィーンにて 1786年 12月 26日作 曲」と書かれている。それだけモーツァルト のナンシーへの強い思いがこの曲にあったの は事実であろう。モーツァルトが1778年11 月8日に父レオポルトの誕生日を祝って出し た有名な手紙がある。その中で「ぼくは詩を 書けません。詩人ではありませんから。ぼく は表現を巧みに描きわけて影や光を生み出す ことはできません。画家ではないからです。 そればかりか、ぼくは、ほのめかしや身ぶり でぼくの感情や考えを表すこともできませ ん。ぼくは踊り手ではありませんから。でも、 音でならそれができます。ぼくは音楽家です から」と述べている通り、イドメネーオの新 しい版に使われた歌詞に音楽を付けて、ナン シーへの秘めたる思いを表現しようとしたこ とは想像に難くない。

Ch'io mi scordi di te? Che a lui mi doni Puoi consigliarmi? E puoi voler che in vita .....

Non temer, amato bene, Per te sempre il cor sarà Più non reggo a tante pene, L'alma mia mancando va.

.....

私があなたを忘れる? あなたは私にすすめられるの 彼のものになれ、 しかもなお生きていろ、なんて?

......

恐れることはないわ、いとしい人、 私の心はいつまでもあなたのもの。 こんな苦痛にもう私は耐えられません。 私の心臓が止まってしまいます。

.....

礒山雅先生は、モーツァルトの艶聞の中で、 妻コンスタンツェが本気で心配したケースが あったとすれば、それはナンシー・ストレー スとの関係だったと思われるとも述べている が、その根拠は分からない。

高橋英郎氏は自身の著書の中で「このアリアは音楽による熱い恋文以外の何物でもない」と述べている。更に「モーツァルトの生涯の恋人といってもよい人へのオマージュである」と述べているが、果たしてナンシーは生涯の恋人だったのであろうか。

野口先生は、新発見のカンタータ K.477a とこのアリア K.505 をセットと考えてモーツァルトのナンシーへのオマージュであるという見方を示された。それも一つの見識であると思ったが、そのカンタータは《オフェーリアの健康回復に寄せて》とそのタイトルにあるように、仲間とオフェーリアにたとえたナンシーの健康回復を素直に喜んで作ったもので、ナンシーのために書いたアリア K.505 とは性格が異なるのではないだろうか。

そこで、モーツァルトのナンシーへのオマージュの作品を自分なりに考えてみた。前述 したナンシーの告別演奏会で何を演奏された

かがポイントだと思う。残念なことにアリア K.505 の他は、何が演奏されたか明らかにな っていない。告別演奏会の1週間ほど前に歌 手エリーザベト・ディストラーの会が催され たが、そこでは二短調のピアノ協奏曲 K.466 が演奏された。この時期、この二短調の他ハ 長調のピアノ協奏曲 K.467 もよく演奏されて いる。同じような時期に作曲された作品を片 っ端から聴いて、どの曲がナンシーの告別演 奏会で演奏するのに相応しいか考えてみた。 その結果、二短調のピアノ協奏曲 K.466 が最 も相応しいのではないかと判断した。それに ナンシーが《フィガロの結婚》の初演にスザ ンナに抜擢されたので、スザンナのアリアも 外すことはできないだろう。以上のことから、 何の根拠もない直感ではあるが、モーツァル トのナンシーへのオマージュは次の三つの作 品のセットであると考えた。

- 1. ピアノ協奏曲第20番 K.466 (1785年2月10日作曲)
- 2. オペラ《フィガロの結婚》K.492 スザンナのアリア

(1785年10月末~86年4月29日作曲)

3. レチタティーヴォとアリア K.505 (1786 年 12 月 26 日作曲)

さて、モーツァルトにとって永遠の恋人は ナンシーとアロイジアのどちらであろうか? (どうでも良いことだけど...笑)

☆ナンシー・ストレース (1765-1817) ☆アロイジア・ウェーバー (1761-1839)

二人が共通していることは、歌が上手くて 美人であるということであろうか。古今東西、 美人の基準は同じなのかどうか分からない が、いくつかあるナンシーの肖像画を見ると、 確かに美人である。

モーツァルトはナンシーについて、「ウィーンで最高の音楽性と教養とテクニックを持った天性の歌姫」と絶賛している。同様にア

ロイジアについても、1778年1月17日に父レオポルト宛の手紙の中で、「彼女はまったくみごとに歌い、愛らしい澄んだ声をしています」と、当時16歳の若きアロイジアを絶賛している。

しかし、モーツァルトが作ったアリアの数 が違う。ナンシーへはアリア K.505 だけだっ たが、アロイジアへは7曲以上のアリアを彼 女のために作ったか、歌わせた。それに付き 合いの長さが違う。ナンシーがウィーンにや ってきたのは1783年、ナンシー18歳の時。 1787 年春にはウィーンを去っているので、ウ ィーンに滞在した期間はわずか4年。しかも ウィーンにきた翌年の1784年3月21日には ヴァイオリニストで音楽博士のヨハン・アブ ラハム・フィッシャーと結婚し、女児を設け た(翌年亡くなる)が、間もなく離婚した。 その後、ナンシーは《フィガロの結婚》の初 演でスザンナ役を演じたが、その時、フィガ 口役であったベヌッチ(当時42歳)とウィ ーンを去る時まで熱烈な恋愛関係にあったと いわれている。(ロンドンに戻ってからは、 若きテノール歌手ジョン・ブラハムと彼女が 亡くなる数年前までの20年間、恋愛関係だ った)

そんな訳で、恋多きナンシーにモーツァルトが入り込む余地はほとんどなかったのではないかと思われる。

他方アロイジアは、彼女が16歳頃に知り合い、モーツァルトが亡くなるまでの期間特別な思いは続いたようである。大司教の命で、1781年ウィーンに着いたモーツァルトは、ザルツブルクの実家に宛て次のような手紙を書いている。「ぼくはあのとき、本当に彼女(アロイジア)を愛していたのです。そして今でも彼女はぼくに対して他人のようではありません。ですから、彼女の夫が嫉妬やきのバカで、彼女をどこにも出さないことはありがたいことで、おかげでぼくは彼女に会わずにすみます」

またモーツァルトの大のフアンだったロン

ドンのノヴェロ夫妻が、年老いたアロイジアに会ったときのことをノヴェロ夫人が自身の著書「モーツァルト巡礼」で次のように回想している。「彼女は、モーツァルトが死ぬ日まで常に自分を愛していたと語ってくれた。そのことは率直に言えば、妹コンスタンツェの嫉妬心を多少刺激したと思う」アロイジア自身もモーツァルトが永遠の恋人であることを堂々と告白している。

以上のことから、モーツァルトの永遠の恋 人はアロイジアであり、ナンシーは憧れの女 性だったと推察する。

以上、長々と、しかも脱線して取り止めのないことを書いてしまったことをお詫びするとともに、新発見のカンタータを通じてナンシーについて多くのことを気付かせていただいた野口秀夫先生に感謝申し上げたい。

### ◇◇◇ 私のケッヘル番号



# K.448「2 台のピアノのためのソナタ」

K.448 M.K.

もしも、モーツァルトの曲で自分の自己紹介をするとしたら(最も自分を表現するイメージに近い曲として選ぶなら)、誠に勝手ながらこの曲が一番自分に近いのでは?というイメージがあります(笑)

冒頭のインパクトのあるユニゾンから始まって、ひたすら明るい旋律と軽快なテンポ、しかしなんといっても圧倒的な特徴は、2台のピアノで繰り広げられる低音から高音までの掛け合いです。そしてその先には感極まった

高音部の達成感が待っていて、私にはいつも 突き抜けるような雲一つない青空が広がって 見えます。また、中間部には、ふと立ち止ま って自らを省みるような場面もあります(笑) この名曲にはいくつかのエピソードがありま す。三点ほどご紹介いたします。

・まず一点は、いわゆるモーツァルト効果の研究の話。1993年に発表されたカリフォルニア大学で行われた実験において、実際に使われたのがこの K.448です。この曲を学生に聴かせたところ、他の曲を聴いた学生あるいは何も聴かなかった学生よりも、空間認識テストにおいて高い成績が示されたそうです。学術的なことは私にはわかりませんが、ただ、この曲を朝の出勤前に聴くと頭がスカッとするので、あながち間違ってはいないというのが私の見解です(笑)

・2点目は、有名な「モーツァルトの連弾の相手」の話です。この曲は愛弟子、アウエルンハンマー嬢と演奏されたことが手紙に記されているそうです。モーツァルトが彼女の容姿を酷評していたことが有名ですが(今ならセクハラになりますが・・)、しかし彼女には毎日2時間もレッスンしていたということですので、非常に才能豊かなピアニストだったのではないでしょうか。

私はこの曲をピアノの先生と連弾したことがあります。これはとても難しい曲です。そして、弾いてみてこそあらためてモーツァルトの天才ぶりに驚愕しました。この曲は、独りずつのパートで弾けばそれほど難しくはないのです。しかし2台の旋律の絡み方は複雑をまりなく、休符やスタートがバラバラのため、二人で合わせてみると今どこを弾いているとは、何の録音技術もない時代に、よくもあったの最音技術もない時代に、よどうやは、がかからなくなります。この時に思ったことは、何の録音技術もない時代に、よどうやにもなるりのような立体的な曲を、どうやにもなり方も非凡なセンスを感じます。モーツァルトの作品を弾いていると、サーブルトの作品を弾いていると、カーツァルトの作品を弾いていると、カーツァルトの作品を弾いていると、カーツァルトは、数学的にもとても優れた人だった

のではないかと思います。

・3点目は、この K.448 を日本で非常に有名にしたものについてです。それは「のだめカンタービレ」という女性向けコミックです。主人公の音大生の女の子「のだめちゃん」と、指揮者を目指すそのイケメン恋人が、世界的な成功を収めるまでをコメディータッチで描いています。

たかが漫画と侮るなかれ!今や日本のコミックは世界でも重要な経済産業ですが、このコミックも日本の音楽業界にもたらした経済効果は絶大でした。ブームになったのは10年ほど前になりますが、当時の音楽会は、演奏プログラムにこの「のだめ」で取り上げられた曲が入っていると満員になったそうです。実際に私も、カワイ楽器店の店員さんから「のだめ様様です」とききました。

このコミックの成功の要素は、なんといっても私は「選曲の良さ」に尽きると思います。作家の方は非常に丁寧な取材をされていたのではないでしょうか。このコミックのおかげであまりメジャーではなかった(?)のに、一躍大人気になった名曲といえば、ベートーヴェンの交響曲第7番、ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番、ブラームスの交響曲第1番だと思います。モーツァルト作品ももちろん多数登場しますが、知名度がアップしたということでは、オーボエ協奏曲 K.314 でしょうか。また、コミックでは実際に聴くことが出来ないので、ドラマ化・映画化もされ、CD も発売されました。

そして、この「のだめカンタービレ」全 24 巻の(取り上げた曲は全部で 100 曲くらいは あるのでしょうか?)なんと!記念すべき最 初とラストの曲がこの K.448 なのです。ストーリー的にも、のだめちゃんの目覚めのきっかけとなった曲、そしてラストを飾った彼女 の原点がこの曲であったことから、私はこの 漫画作家さんは素晴らしい感性の持ち主だと 思っています(笑)まさに、世界へ羽ばたく若 者を描くに相応しい名曲ではないでしょう

カシ

ちなみに余談ですが、このコミックの番外編ではまるまる一冊「魔笛」を取り上げています。また、この漫画作家(女性)さんは妊娠・出産をされていますが、出産後のコメントとして「モーツァルトを好んで聴くようになった」と載っていたことを記憶しています。まだこの曲を聴いたことがない方は、ぜひ一度聴いてみてはいかがでしょうか。また、2台のピアノが必要なことから、例会での演奏実現は難しいのが現状ですが、2台ピアノの生演奏は迫力が違います。いつか!実現できることを願ってやみません。小



モーツァルト余聞: アヴェ・ヴェルム・コルプス

K.401 Y.N.

私の好きなモーツァルト・ベスト 10 のアンケートで、不動の人気を得た、「アヴェ・ヴェルム・コルプス」ですが、ロビンズ・ランドン著、石井宏訳の、「モーツァルト」には、冒頭の訳者注に、古典読み(ラテン語)の発音のとおり、アウェ・ウェルム・コルプス、と表記すると書いてあります。ラテン語については、初歩のまた初歩の知識しかありませんが、調べてみると石井氏の言うとおりです。

これは、日本だけの現象でしょうか。ウィーン在住のオペラ歌手の友人に尋ねてみました。答えは、彼の知る限り、「世界中でアヴェ・ヴェルム・コルプス」だそうです。イタリア語的な発音が世界に敷衍しているようです。

ちなみに、「アヴェ」は、ようこそ、やあ

やあ、こんにちは、さよなら、などの意味で、 親しみのある言葉のようです。これに近い日 本語だと「どーも」でしょうか。

かつて、ポンペイ遺跡を紹介するテレビ番組で、ある貴族の家が映し出されたときに、その玄関の床タイルに、「AVE」の文字を見たことがあります。「ようこそ」の意味でしょう。



私の「ナンシー・ストレース」像

K.488 ガーディナー・イズミ

### 1. 第465 回例会の報告

7月21日(ルーテル市ヶ谷会議室)の第465 回例会は野口秀夫講師による講演『歌姫ナンシー・ストレースへのオマージュ』~新発見 のカンタータ K.477a を巡って~ だった。

《フィガロの結婚》の初演(1786年)でス ザンナを歌うことになる英国出身のソプラノ 歌手アン・セリーナ (通称ナンシー)・スト レース(1765-1817)は1785年一時、発声障 害になった。それは兄スティーヴン・ストレ ース作曲のオペラ《不満な新郎新婦》初演で のことだった。幸い3ヶ月半後に健康が回復 し、サリエーリのオペラでオフェーリア役を 歌える見通しがついたことを祝い、ダ・ポン テが詩を書き、サリエーリ、モーツァルトそ してコルネッティが共作で仕上げたカンター タを出版する、という広告が当時の新聞に載 った。しかし、後に K.477a となるこの曲は紛 失したと考えられていた。 それが 230 年後の 2015年にプラハの国立博物館で発見された。 その曲は、サリエーリ、モーツァルトの共作 というあり得ない出来事であり、それに無名

の作曲家がからみ、謎につつまれている。この謎解きを野口さんが当時の音楽事情に基づいて行われた。その試みは、歴史をたどる知の探求となる。

皇帝ヨーゼフ二世は、1778年からドイツ文化高揚のためドイツ語オペラを創作上演する『国民劇場』運動を進めていたが、モーツァルトの《後宮からの誘拐》以外には質の高いオペラが出なかった。皇帝はこの運動を諦め、1783年にイタリア・オペラ路線を復活させた。その歌い手をそろえる必要から、駐ヴェネツィア大使に命じて、イタリア各地の歌劇場で活躍している歌手を引き抜いた。ナンシー・ストレースをはじめ、後に《フィガロの結婚》でフィガロを歌うフランチェスコ・ベヌッチ、伯爵・マルチェリーナを歌うマンディーニ夫妻、バジーリオを歌うマイケル・ケリーなどがウィーンに集結した。

ナンシーの声の回復を祝して作られたカンタータ《オフェーリアの健康回復に寄せて》は、ダ・ポンテが30連からなる古いイタリア田園詩を書き、4連に曲が付けられた。サリエーリが1~2連(今日の復帰上演への誘い)を、モーツァルトが3~4連(過去の上演を回顧し復帰上演への期待)を、そしてコルネッティが再び1~2連を作曲している。

野口さんは、コルネッティとは誰かという 問いを立て、偽名が使われたに違いないとの 判断から、本人捜しの推理を展開される。そ して、名付けの習慣や語源、発音から、兄の スティーヴンと結論づけられた。次に、誰が お祝いを発案したのかと問われ、ナンシーに 好意を抱き、ダ・ポンテ、サリエーリ、コル ネッティの三者をつなげられるのはモーツァ ルトしかいないと推定された。

野口さんは最後に、稀にしか入手できない DVD で三者の作曲フレーズを上映しながら 比較された。傑作というわけではないが、モーツァルト作曲のパートが一番心がこもって いたように感じられた。

野口さんの講演はテーマが絞り込まれてい

て、限られた時間で言いたいことの数分の一 しか語れなかったろうと思う。私はプフベル クについて調べたときから、モーツァルト周 辺の女性の後半生ないし余生に注目してき た。調べているうちに、ナンシーについての 情報にも多く接した。野口さんの話に触発さ れて、私が捉えたナンシー像を記してみた。

#### 2. 私がナンシーを知ったきっかけ

モーツァルトが言ったように、あの時代ア リアの作曲は仕立屋による「良く仕上がった 服のように」歌手の声域、技量、性格に合わ せて行われていた。モーツァルトもオペラを 作曲するとき、歌手が決まるまで手がつけら れず、決定が公演直前になると、短時間での 作曲の苦労をよく語っている。そうやって出 演歌手のために楽曲を書くので、初演で歌う 歌手を創唱歌手と呼び、特別視する。作曲家 の創作意図が創唱歌手を通じて最もよく表現 されるから注意しようと思ったところで、《フ ィガロの結婚》のスザンナ役を創唱したナン シーを知った。その次に、ヴェネツィアでス カウトされ、ウィーンに送り込まれた事情に 興味をもつことになった。そして、モーツァ ルトが《どうしてあなたを忘れられよう》 K.505 を贈って親愛の情を示したことが、私 の記憶の断片である。

### 3. ナンシーの生い立ち \*1,\*2

ナンシーは1765年ロンドンで生まれた。父はイタリア出身でアイルランドに帰化したコントラバス奏者、母はイギリス人である。1773年8歳に満たない時に初めて人前で歌い、神童 child prodigy とみなされた。父親は英才教育を考え、イタリア人カストラートで後に作曲も手がけるラウッツィーニに師事させる。翌年にはロンドンのヘイマーケット劇場のコンサートで歌っている。オペラへの出演は、1776年に師であるラウッツィーニのオペラ《愛の翼》の初演で、キューピット役がデビューとなる。因果は巡ることになるが、《エクスルターテ・ユビラーテ》K.165はモーツァルトが1773年ミラノで、ラウッツィーニの

ために作曲した曲である。

1778 年末 13 歳のナンシーは、オペラ歌手として世に出したいという親の思いで、両親に連れられ父親の母国イタリアへ渡る。兄スティーヴン (1762-96) は先にナポリに留学し作曲を学んでいた。子供の才能を認め、英才教育を施される経過は、モーツァルト姉弟と似ているように思う。彼女は早速才能を発揮して、イタリアの主要な歌劇場の舞台に立った。ナポリ、フィレンツェ、ルッカ、パルマ、リヴォルノ、ミラノ、ローマ、ヴェネツィアで歌っている。

マイケル・ケリーは回想録のなかで、ストレース兄妹との終生つづく友情のきっかけとなった、リヴォルノ(ピサの南隣の町)港での愉快な出逢いを紹介している。

<船から岸に上がると、突堤にいた若い男女が、通行人の品定めをしていた。女性のほうがわたしを見てくすくす笑い、そちらに近づいていくと、連れに英語で話しているのが聞こえた。もちろん、わたしにはわからないと思ったのだ。「ほら、あの娘、男装してるわ」。わたしが同じ言葉で答えたので、彼女は目を丸くした。「いえいえ、お嬢さん。これでもれっきとした男です。どうぞお見知りおきを」> 私たちがナンシーのその後のエピソードを知ることができるのも、多くはケリーの回想録でおかげである。

### 4. ウィーンのナンシー

1783 年、駐ヴェネツィア大使ドゥラッツォ 伯爵はウィーン宮廷の指示で、18歳のナンシ ーを含むオペラ歌手をブルク劇場に引き抜い た。招聘されたのは、フランチェスコ・ベヌ ッチ、マンディーニ夫妻、マイケル・ケリー、 フランチェスコ・ブッサーニであった。どう して大使がオペラ歌手をリクルートできたの か不思議に思った。ドゥラッツォに興味をも ち調べてみると、マリア・テレージア時代の 宮廷音楽監督であったが、女帝の不興を買い 1764 年ヴェネツィア大使に左遷されていた。 音楽に通じていたわけだ。そして、ヴィヴァ ルディの楽譜を後世に伝える上で一役買って いたことを最近知り、ヴィヴァルディに親し んだ者として、ありがたく思った。\*3

ナンシーは1783年4月サリエーリの《やき もち焼きの学校》で、ウィーンでのデビュー を果たす。このオペラはブルク劇場がイタリ ア・オペラ路線に転換してから最初のオペラ ブッファである。次にパイジェッロの《セ ビーリアの理髪師》のロジーナを演じている。 最初のシーズン、サリエーリ、チマローザ、 サルティ、アンフォッシ、パイジェッロによ る六つもの新作オペラに出演し、いきなり売 れっ子になった。1783-86年の間に10曲以上 の新作オペラ(パイジェッロ、サリエーリ、 スティーヴン・ストレース、イ・ソレール、 モーツァルト) に出演し、全て主役を張って いる。仲間はウィーンでも結束は固く、ブル ク劇場で頻繁に共演した。《フィガロの結婚》 の初演にもそろって参加している。

彼女がプリマ・ドンナとして主役を張り続 けられたのは、彼女の歌唱力と卓越した演技 力を活かしたアンサンブルの中で、真の実力 を発揮できる典型的なブッファ歌手であった ためとされる。しかし、もう一つ付け加える 必要があるだろう。彼女はヨーゼフ二世の大 のお気に入りだった。皇帝の側近で、膨大な 日記を残したツィンツェンドルフ伯爵もお追 従ではないだろうが、しばしばナンシーのオ ペラを鑑賞し、日記で「天使の如く歌った」 「姿のよさ、表情豊かな美しい瞳、白いうな じ、血色のよい唇、きれいな肌、子どものよ うな天真爛漫さ」を絶賛している。当時の評 判からみると、セリアを華麗に歌い上げるよ りは、ブッファのスーブレット(利口で機転 のきく小間使い) 役など歌と演技を一体化し て演じ、魅力を発揮している。容姿は均整の とれた美人というよりは、愛嬌があって小柄 でぽっちゃりしたタイプで、かわいい系の美 女、モーツァルト好みの女性だったようだ。

1786年5月1日《フィガロ》がブルク劇場 で初演された。モーツァルトは1782年に《後

宮からの誘拐》K.384 で評判をとったが、そ れからなぜ3年半もの空白があったのだろう か。《後宮》はジングシュピールだから、本 格的なイタリア・オペラを作曲して認められ たいと熱望していた。それで、《カイロの鵞 鳥》K.422 に取り組み、《騙された花婿》K.430 では配役にナンシーを含むイタリア・オペラ 団を設定して作曲を始めた。しかし、いずれ も未完成に終わった。宮廷の注文が得られな かったためだ。作曲機会がないから能力が発 揮できず、オペラ作曲家として認知されない。 作曲機会を求めても縄張りを守ろうとするイ タリア・オペラ陣営に邪魔される、という悪 循環を突破することができなかった。ブルク 劇場で第一線の歌手をそろえてオペラを上演 するのは、大変敷居の高い挑戦であった。

そんなウィーンのオペラ事情、モーツァル トの置かれた状況とは対照的に、ロンドンの 無名なオペラ作曲家スティーヴン・ストレー スに声がかかり、上述のようにブルク劇場で 《不満な新郎新婦》が初演された。さらにも う1曲宮廷から注文を受け、ブルク劇場で上 演された。これは全く異例の事態で、ヨーゼ フ二世の意向が働いたに違いない。皇帝お気 に入りのナンシーが取り入って兄を特別に売 り込み、皇帝がこれに応えたと考えられてい る。石井宏さんは「ナンシーは皇帝のお手付 きとなり、それにより当然のことのように宮 廷劇場のプリマ・ドンナとなった。」と言って いるほどである。\*4 そんな状況で、モーツァ ルトが売れっ子のナンシーに自作の曲を歌わ せることなどできなかった。

そんな中、イタリア・オペラの実績がなく、ヨーゼフ二世の覚えもよくなく、政治風刺に問題含みの《フィガロ》の注文が受けられたのは奇跡と言わざるを得ない。この注文によってイタリア・オペラ団を配したブルク劇場での公演が可能になった。モーツァルトが《フィガロ》に着手したのは1785年10月と考えられるから、ナンシーと接触できるようになったのはその直前と考えられる。接して日浅

く、《オフェーリアの健康回復に寄せて》を モーツァルトが主導して合作したとすれば、 《フィガロ》の成功の鍵を握るプリマ・ドン ナの出演の見込みが立ったことを、誰よりも 彼自身が喜んだためだろう。

ナンシーのスザンナ役はどのように決まったのだろうか。私は詮索を始めた。ナンシーはパイジェッロの《セビーリャの理髪師》でロジーナ役を歌い、成功を収めていた。その延長で常識的には伯爵夫人が適任だったと思われる。私はナンシーの発声障害を知ったとき、声域が十分回復していないことをモーツァルトが配慮して、スザンナに変えたのだろうと考えた。しかし、ナンシーのウィーンでの活躍振りをみると、オペラ・ブッファのスーブレット役で傑出していた。モーツァルトが《騙された花婿》でナンシーを想定した役もその類だった。スザンナ役にしたのは、歌唱力と演技力が融合した役どころが、《フィガロ》の魅力の核心と考えたためではないだろうか。

ウィーンのオペラ界でもてはやされたナンシーも 1786 年になると急に冷えてきた宮廷劇場の空気を察知して、ロンドンへの帰国を考え始めたようだ。ヨーゼフ二世はストレースを高く評価していたが、1788 年の契約を確約せず、ナポリの歌手との契約を指示している。病欠が多く、4500 フローリンにもなる高額の年俸に見合わないと考えたようだ。ナンシーは市民社会が急速に発展し、音楽市場が拡大しつつあるロンドンに後半生を賭けた。

ナンシーの告別コンサートは、1787年2月23日に行なわれた。翌朝早朝、母と兄のスティーヴン、マイケル・ケリー、モーツァルトの弟子のアトウッドを伴った一行は帰国の途についた。モーツァルトも一行と共にロンドンに行こうとしたが、レオポルトの反対で実現しなかった。

#### 5. イギリスへ帰国したナンシー

ロンドンに帰ったナンシーは、声の不調からオペレッタにしか出演できなくなった。し

かし、演技力で舞台女優として人気を博した。 1789年に出演していたキングス・シアターが 焼失したので、兄のスティーヴンが音楽監督 をしていた劇場に移り、ほとんどすべての兄 のオペラを歌った。兄妹の絆はここでも生き ている。また同じ年、情に厚い彼女は、ウィ ーに残った親愛なるベヌッチを、約束通りロ ンドンに招待している。

1796年にスティーヴンが突然亡くなると、テノール歌手ジョン・ブラハムと共にヨーロッパ各地を演奏して回る。そして二人は内縁関係、つまり愛人として余生を送ることになる。ナンシーは大陸からイギリスに帰ってからもオペレッタに出演し、1808年に引退する。1817年にロンドンで亡くなった。

### 6. ナンシーは親離れしたか

ナンシーは 1784 年ジョン・フィッシャーというイギリス人と結婚をした。彼はオックスフォード大学の音楽博士で、ヴァイオリニスト兼作曲家だった。彼女は 19歳、夫は再婚で40歳だった。母親が、娘の出世に有利とみて縁談を進め、娘に押しつけたようだ。ナンシーの父親がイタリアで死んだあと、母親だけが彼女の面倒を見ていたので、母の意志に逆らえなかったのだろう。不幸に見舞われることになる(レオポルトがナンネルに押しつけた結婚とそっくりである)。

フィッシャーとの結婚生活は短かった。通 説では、アインシュタインが言うように「彼 は結婚すると妻をひどく虐待したために、皇 帝の怒りを買って、帝国領土から追放された。 アンナ・セリーナは再び旧姓に帰り、故郷で は生涯自分の結婚を堅く秘密にしていた」\*5 (ウィーンではイタリアでの呼称に準じてセ リーナ・ストラーチェと呼ばれていた)。

もう一つ不幸な話が伝えられている。1785年7月ストレースの乳児が亡くなった。ツィンツェンドルフが「ストラーチェの娘は餓死した。それはその母親が意地汚さから乳母に暇を出したからだ」という噂を伝えている。何でも母親任せにしていたのだろうか。

ストレース母娘の関係は、母親の過保護あ るいは娘の生活に対する支配、母への依存と 甘えあるいは服従であり、《魔笛》の夜の女王 とパミーナの関係に似ていると思った。私は アマデウス通信 No.23 (2008.1.1) でユング派 心理学者エーリッヒ・ノイマンの「モーツァ ルトの『魔笛』について」\*6を引用して《魔 笛》を論じたのを思い出す。ノイマンは「母親 に密接に結びついている娘が、男性的なもの によってさらわれ、娘を奪われた母親がそれ にあらがうという図式は、女性的なものの発 達の途上における本質的な葛藤であって、そ れによって母親の母権的世界に帰属するか、 父親の父権的世界に帰属するか、あるいは恋 人との出会いの世界に帰属するかが決まるの である。」と言う。つまり、夜の女王のもとで 母の言いつけに何の疑いももたず育った娘 が、ザラストロの理性的な世界で意識に目覚 め、試練を経てタミーノとの平等な愛の世界 を見出し、精神的に自立してゆく。これは一種 の精神的な「母親殺し」である。ノイマンは個 人の心の成長と人類の精神の発展史とが重ね 合わされた物語として、読み解いたのである。

レオポルトの操り人形のような成長過程を たどったモーツァルトが、ウィーン定住によって父親支配を脱する姿は、フロイトの言葉 を借りれば、精神的な「父親殺し」である。 フロイトの「エディプス・コンプレックスと その内面化による超自我の形成」が息子を支配する父親との戦いであるなら、ユングの「グレイトマザーからのアニマの救出」は性的抱擁力で子供を抱き締め自立させない母親との戦いである。

そこで私は、ナンシーは試練を経て母親から自立を果たしたかに着目する。ロンドンへの帰国の決断は、ナンシー自身の思い切った決断であり、精神の独立がうかがわれる。しかし、疑わしいエピソードもある。ストレース一行は帰国途上、1787年2月26日の晩ザルツブルクに着き、翌日レオポルトが朝の10時から午後2時まで市内の観光案内、晩には

大司教の前でストレースは3曲のアリアを披露して50ドゥカーデンを得るアレンジをして、歓待した。レオポルトは2月23日ミュンへン旅行から帰ったばかりで、老躯にむち打つ、死を3ヵ月後にひかえての尽力であった。にもかかわらず、ナンシーはレオポルト宛の手紙をモーツァルトから預かっていたが、母親任せにしていたので渡し忘れてしまった。その手紙には「死は正確には僕たちの生の真の最終目標なのですから……」というモーツァルトの有名な死生観が書かれていた。\*7ナンシーはいつ母親から自立したのだろうか。

### 7. 不幸な結婚とその影響

ナンシーの夫はヨーゼフ二世によって国外 に追放された。私は、皇帝が離婚させて国外 追放したのだと考えたが、その後の推移をみ ると、法的に離婚させられなかったので、追 放したように思われる。夫は裁判所の命に素 直に服して帰国したという。カトリック教国 では婚姻は秘められた神のみわざの跡形(秘 蹟)として、離婚は認められない。それがどれ ほど強固な規範であったか意識したのは、パ リでモーツァルトが世話になったグリム男爵 の伴侶デピネ夫人の身の上を知ったときであ る。彼女は貴族と結婚したが、夫は放蕩三昧 で、屈辱の日々を送る。離婚が認められず、 グリムの愛人といういささか不名誉な立場に 甘んじた。その経験を通して、彼女は女権論 の先駆となる教育論を著した。モーツァルト はパリで母を亡くした直後に、グリムの家に 転がり込んで、デピネ夫人の世話になった。 この時、夫人に女性の尊厳を教え込まれた、 それが、モーツァルト・オペラに現れる女性 尊重の精神の基盤になっている、そんな仮説 を私は立てている。そうした問題意識で、デ ピネ夫人の生涯をここ 10 年時々調べ、ついで に離婚問題も調べている。当時、姦通や虐待 を理由とした離婚は認められたが、それは夫 に関してで、妻にはほとんど認められなかっ た。現実には別居を認めたり、妻が結婚の事 実を口外しないことで実質的には離婚扱いさ

れたが、法的には認められなかった。再婚は 夫の死を証明しないとかなわなかった。一方、 アロイジア・ランゲは 1795 年に離婚してい る。原因は夫の浮気であっただろう。ヨーゼ フ二世は個人の自由の拡大と、カトリック支 配を排除するため、離婚を法制化したと私は 推測する。皇帝は法治主義を徹底し、多くの 法を制定、民法の体系化に力を入れた。1787 年に発布された拷問の禁止、死刑の禁止、残 酷な刑罰の禁止、さらに婚外子と嫡出子の平 等権や相続権の均等化などにも着手した。離 婚の法制化もこの頃ではないかと思うが、根 拠を求めてオーストリアの法制史を調べて も、門外漢には全然手がかりが得られない。\*8 フランス革命の結果、個人の自由を尊重する 動きの中で離婚が合法化され(ナポレオン法 典)、各国に波及していったが、オーストリア はそれに先んじているように思われる。オー ストリアで民法典が成立したのは19世紀前 半、ナポレオン法典と同時期だった。

当時教会裁判所訴訟では、離婚とは別居ま たは婚姻無効を意味した。《フィガロ》の筋 書きでも、結婚の成立、契約の有効性が問題 とされる。初夜権という実体のない領主権が 主題になっているが、問題は貴族が領地の裁 判権をもっていることだと私は考えている。 当時の法でも近親婚の禁止、脅迫による契約 の無効は認められていたから、結婚無効の申 し立てはできた。第2幕でマルチェリーナの 借金をかたにした結婚契約が問題にされ、第 3 幕で裁判官のドン・クルツィオが契約の履 行を求める。この場面で伯爵は領主裁判権を 楯に、「裁くために私がここにいるのだぞ」 「判決は私の好きなようにするぞ」という科 白を吐く。裁判官を言いなりにできたのであ る。しかし、親子関係が判明すると、さすが に契約の無効、婚姻の不成立が宣言される。

ョーゼフ二世は農奴解放令を発布し、封建 的な領主・農奴関係を解消して、貴族の権力 や経済基盤を解体、中央集権化を推し進めて いた。ダ・ポンテは回顧録で、《フィガロ》 は政治風刺の棘を取り去って、宮廷の上演許可を取り付けたと自慢しているが、ヨーゼフ二世には農奴解放令などに対する貴族の反発を抑える必要があり、両者には貴族批判で共通の利害があった。だから、ダ・ポンテは検閲官の目先をごまかしたのではなく、皇帝との間で表現の限界を入念にすりあわせていたのではないか。裁判をこけにして国家批判をするのはタブーだったというのが現在にいたる多数派の意見だが、皇帝はむしろ《フィガロ》の上演を促したのだという少数派の意見に、私は賛同する。

ナンシーは結局離婚できなかったと、私は 素人考えで結論づけた。そのせいもあったの だろう、ウィーン時代はベヌッチの愛人とな り、劇場の娼婦という悪い噂も立てられた。 モーツァルトの浮気相手という説も多くあ る。ウィーンオペラ界のスターはモーツァル トにとって高嶺の花であり、公的にはたかだ か2年の付き合いである。男女の仲は常識で 推しはかれないとはいえ、簡単に手出しはで きなかったであろう。アインシュタインは言 う。<モーツァルトと彼女とは、深い同感に よって結びついていたにちがいない。彼女は 美しく、愛嬌があり、芸術家で、完璧な歌手 であった――ヴィーンのイタリア・オペラ劇 場における当時の彼女の俸給は前代未聞の高 額だった。ソプラノのための劇唱とアリアで、 オブリガート・ピアノとオーケストラ伴奏付 のもの『どうしてあなたを忘れられよう』 (K.505)は彼女に捧げられている。モーツァル トの『主題による作品目録』には、「ストラ ーチェ嬢とわたしのために」と書いてあり、 自筆楽譜には、「ストラーチェ夫人のために、 その下僕にして友なる W.A.モーツァルト、ヴ ィーンにて、1786年12月26日作曲」と記入 してある。それは、歌唱声部とピアノとのデ ュエットに伴奏のついた楽曲であって、音響 による愛の告白であり、実現されえない関係 の、理想的領域における浄化である。>\*5 プ ラトニックという判断を下したのだろう。

ナンシーは帰国してからモーツァルトとの 間で手紙のやりとりを続け、手紙を大切に保 存していた。おそらく世間の眼に触れてはい けないと思って、死ぬ前に誰にも見せること なく処分した。二人の友情が続いていたこと を知って、ほっとする。モーツァルトがナン シーからもらった手紙は、コンスタンツェが 破棄したと考えられている。いずれかの手紙 が残っていたら、晩年のモーツァルトの心境 を知ることができただろうと思うと、残念だ。 ナンシーとブラハムの間も愛人関係とされ るのは、やはり離婚が認められなかったせい だろう。イギリスはヘンリー8世が再婚する ために離婚を企てるが、ローマ・カトリック 教会から拒否されて対立、英国国教会を設立 した国柄である。離婚承認の先進国だと思っ ていたが、その後紆余曲折があり、また男優 位の社会に変わりはなく、18世紀にいたって も女性の離婚は困難だった。1802年ナンシー はブラハムとの間に子供をもうけたが、立派

私がナンシーについて書くなど思いもしな かったが、野口さんに刺激されて手をつけ、 深入りしてしまった。自分なりのナンシー像 を形成できたが、副産物も多かった。ウィー のオペラの変遷はヨーゼフ二世の意向に沿っ て展開したこと、政治と軍事などで忙殺され た皇帝にとって音楽など息抜きに過ぎないと 思っていたが、思いのほか音楽に注力してい たこと、オペラの作曲家や配役にまで皇帝の 意向が及んでいたこと、《フィガロ》の成立 過程を一歩踏み込んで理解できたことなどで ある。ナンシーについて、断片的な記憶を結 びつけ、雑多な知識を拾い集め、つたない推 理でつなぎ合わせただけの考察だが、いつも 新たな問題に気づき、興味はつきない。 <注>

に成人して聖職者になっている。社会的には

認知されていたのだろう。結婚の失敗にもめ

げず、懸命に生き抜いた女性であった。

\*1 野口秀夫『オフェーリアの健康回復に寄せて K.477a (Anh.11a)』神戸モーツァルト

研究会第 247 回例会(2016 年 4 月 3 日)

\*2 ジェイン・グラヴァー『モーツァルトと女性たち』.白水社.2015

\*3 フェデリーコ・サルデッリ『失われた手稿譜』(ヴィヴァルディをめぐる物語),東京 創元社,2018

ヴェネツィア駐在大使ジャコモ・ドゥラッ ツォ伯爵(1717-1794)はヴィヴァルディの手稿 譜が今日に伝わる上で、重要な役割を果たし ている。ヴィヴァルディは1741年ウィーンに たどり着くが、不遇な死をとげる。ヴェネツ ィアの留守宅に残された楽譜は、弟のフラン チェスコから元老院議員ヤコポ・ソランツォ 伯爵が買い取り、その後ドゥラッツォ伯爵の 手に渡った。伯爵の死後、甥のジェローラモ ・ドゥラッツォに譲渡され、ジェノヴァの邸 宅に移送され、1世紀に渡り大事に保存され た。その後手稿譜は遺産相続で二分割され、 行方不明になる。20世紀前半、トリノ大学の 音楽学者とトリノ国立図書館長の手で探索、 資金集め、買収交渉など苦労の末、トリノ国 立図書館に所蔵されるに至った。

調べてみるとドゥラッツォ伯爵は 1754 年 にエステルハージ伯爵からウィーン宮廷劇場 総監督の役職を引き継ぎ、フランス・オペラ を導入してイタリア・オペラとの融合による 改革に取り組んだ。またフランス・オペラ団 をウィーンに呼んだとある。となると関係す るのはグルックだなと推理すると、ドゥラッ ツォが台本作者カルザビージとグルックにオ ペラ改革を委ね、改革オペラ第一作『オルフ ェオとエウリディーチェ』が誕生したという。 グルックがオペラ改革をしたと聞かされてい たが、提唱者はドゥラッツォということにな る。1783年にイタリア・オペラ団が雇われる と、フランス・オペラ団が解雇されたと昔聞 いたことがあるが、話のつじつまが合う。さ らに、ドゥラッツォがウィーン駐在ジェノヴ ァ大使だったという記述に出会った。ドゥラ ッツォ家はジェノヴァの提督を出したほどの 名門であり、マリア・テレージアの人材登用 政策だとありうることだと思った。テレージ アはイタリア・オペラの古風なセリアが好み だったから、フランス・オペラの導入はヨー ゼフ二世の意向だったのだろう。

\*4 石井宏『モーツァルト タイムカプセルの 旅』 音楽之友社.1998

\*5 アルフレート・アインシュタイン『モーツァルト』,白水社,1961,pp.109-111

\*6 エーリッヒ・ノイマン『女性の深層』, 紀伊国屋書店,1980 所収。ノイマンはユングの 高弟で後継者と目された。女性の心理と創造 のメカニズムの探求を中心に研究を深めた。 \*7 『モーツァルト書簡全集 VI』 白水

社,2001, p.367, p.371, p.384

\*8 E.マホフスキー『革命家皇帝ヨーゼフニ世』倉田稔監修,藤原書店,2011,p.127 本稿を書き終えて次の記述に接した。私の推理とは矛盾があり、困惑している。「一七八三年一月に公布された結婚令によって、結婚は市民的契約であると声明された。教会での結婚式が義務付けられ、カトリックでは認められなかった離婚が可能となった。また七月には婚外子の承認が宮廷布告で決定された。」



# ☆ 愛好会に入って一年

### K.279 髙橋 郁代

朝、目覚めたときに頭にかかる曲がモーツァルトだった場合、曲名とケッヘル番号がまだ当てられません。曲名を言い当てたいのですが。

「私の好きなモーツァルト・ベスト10」に入れなかったジェームス・レヴァイン演奏の「ピアノと管楽のための五重奏曲」が今のお気に入りです。演奏者の描く想いが曲に出るのか、奏者が変わるとぐっと良い曲に思えます。私は愛好会に入って一年経ちました。

2017 年 11 月例会の玉井さんのアンコール曲「クライスラー編曲 セレナード第 7 番 K.250 第 4 楽章が終わると、会場に「お~っ」という感動の声が上がりましたね。2018 年 1 月例会では梯さんの伴奏の下「アヴェ・ヴェルム・コルプス」の合唱に感動し、買い求めた「子供に伝えるモーツァルト」の DVDで、梯さんの曲に描く想いを共有できました。3 月例会では、光が丘美術館の都会的な屏風に華を添えてもらい、近藤さん方の夢のような声楽を聞きました。10 月例会での国立音大大学院オペラ「コジ・ファン・トゥッテ」アリア「恋人のやさしい息吹は」に、フィオルディリージでなくても、すっかり"コジ・ファン・トゥッテ"になっていました。

amadeusuネットのお知らせで、モーストリー・クラシック「旅するモーツァルト!」を読んだり、「体にいい音楽会」を知り、オールモーツァルトプログラムで宮村和宏さんの輝く音色のオーボエが聞こえる木管八重奏版の「フィガロの結婚」序曲や湘南鎌倉総合病院小林修三先生によるモーツァルトの病のはなしに、もっともっと長生きして作曲してほしかった…と思いました。

自分で見つけた調布国際音楽祭 2018 では、バッハ・コレギウムジャパンによるオペラ「バスティアンとバスティエンヌ」のバスティエンヌ役 (イギリスの歌姫ジョアン・ラン) が、バスティアンを日本語で「サイテー!」となじり、大受けでした。 モーツァルトの生きた時代のオペラで観衆は、きっと泣いたり笑ったり楽しんだのだろうな…と想像しました。

また、テオドール・クレンティスのモーツァルト歌劇 CD のライナーノートが圧倒的で、モーツァルトの曲に込めた想いを多面的に分析していますね。

もし、タイムワープができたら、わたしはロイトゲープになりたい、と思っていましたが仮面舞踏会でメヌエットを踊れるのは貴族だと本で読み、モーツァルトの演奏で踊ってみ

たいとも考えます。 是非モーツァルト自身 の演奏をあの時代に行けたら聞きたい。

モーツァルトの友情に対する厚さにあやかって、愛好会の方々も『アマデウス通信』のガーディナー・イズミさんも友情を盛り上げましょう。

例会に行くのに精一杯な者のおこがましい願いです。

\* \* \*



▽前号で「私の好きなモーツァルト ・ベスト 10」を特集しましたが、 『アマデウス通信』誌上での反響は 伝わっていません。皆さん改めてモ

ーツァルトを聴き直して、色々な感想をもた れたことと思います。アンケートに付記され た「私のひとこと」をワープロ入力し終え、 皆さんのモーツァルトへの思いの熱さをひし ひしと感じました。アンケートのすべてを公 表したらという強い声があり、次号で発表す ることにしました。12月例会の場を借りて趣 旨説明をし、公表について皆さんの了承を頂 きました。公表を辞退される方はいませんで したが、欠席の方でもし辞退を希望する方が おられましたら1月末迄に運営委員に申し出 て下さい。▽髙橋郁代さんから熱気に溢れる 投稿を頂き、大変嬉しく思います。はち切れ んばかりのエネルギーが湧出しているような 感じです。▽編集子は何となく次のような物 理的イメージで原稿を待っています。水は液 体のとき分子同士の凝集力で塊になってい て、温度が上がると運動エネルギーを得て凝 集力を振り切って動き回り、水面を飛び出し て水蒸気になる(蒸発)動きが活発になりま す。他事に追われて、熱風を吹きかけて投稿を 煽るような余裕はありませんが、愛好会の熱 気が高まれば、自然現象のように投稿が湧き 出して来るように思っています。 ▽2019 年は 1月例会のオペラで幕を開けます。創立40周 年を一年後に控え、愛好会の熱気が高まるこ とを期待します。 (ガーディナー・イズミ)